

# 競技意欲・競技不安と原因帰属の関係

愛知教育大学 筒井 清次郎

## The Relationship between Attribution Scores and Competitive Motivation or Competitive Anxiety

Seijiro Tsutsui Aichi University of Education

### Abstract

The purpose of this study is to investigate relationship between attribution scores and competitive motivation, or competitive anxiety.

Subjects were 44 athletes in track and field, composed of 25 males and 19 females.

Questionnaires were administered over a period of one year to subjects as soon as they had competed.

The elements of causal attribution were effort, ability, luck, opponents and physical condition.

Results were as follows:

1. The athletes who perceived the change of their own record as improving attributed their success to effort. This seems to be the self-enhancing bias.
2. The athletes who perceived the change of their own record as improving attributed their failure to luck or physical condition. This seems to be the self-protecting bias.
3. The athletes of low competitive anxiety attributed their success to effort or physical condition.
4. The athletes of high intrinsic motivation attributed their failure to physical condition. This seems to be the self-protecting bias, too.
5. The athletes of high competitive motivation and high psychological ability attributed their failure to luck. This seems to be the self-protecting bias, too.

Key words : causal attribution, competitive motivation, competitive anxiety.

### 目 的

動機づけ研究の中で、達成動機づけと原因帰属の関係は、従来から研究されてきている（広瀬・石井・木村・北田，1982；Kukla，1972；Touhey & Villemetz，1975；Weiner，1974；Weiner & Kukla，1970）。そこでは、やる気の高い者は成功の原因を能力や努力に帰属し、失敗の原因を努力不足に帰属する。これに対して、

やる気の低い者は成功の原因を外的要因（運や課題の困難度）に帰属し、失敗の原因を能力不足に帰属するという傾向を示しているものが多い。

体育場面においては、達成傾向の高い者は成功の原因を努力に帰属し、達成傾向の低い者は失敗の原因を能力不足に帰属すると報告されており（筒井・天野・西田，1989）、従来の研究結果に類似した帰属が示されたものの、意欲の高

い者の、成功時の能力帰属や失敗時の努力不足帰属を支持するに至らず、また、意欲の低い者の成功時の外的要因帰属も支持されなかった。

競技スポーツ場面においては、やる気の高い者は、低い者よりも、成功の原因を能力や努力に帰属し、自己高揚帰属を行い、失敗の原因を課題の困難度や運に帰属し、自己防衛帰属を行うと報告するものが多い (McAuley & Russel, 1983; Lefebvre, 1979; Lefebvre & Cunningham, 1977)。これらの結果の差異は、スポーツ場面独自の帰属研究の必要性を示唆している。

しかし、従来の競技スポーツ場面における帰属研究では、いくつかの問題点があるように思える。第1に、Brawley & Roberts(1984)や、Rejeski & Brawley(1985)が指摘するように、帰属因は能力、努力、運、課題の困難度の4帰属因だけに限定されることが多いが、体調や雰囲気などの他の帰属因を考慮する必要があると思われる。第2に、1度だけの帰属を個人の帰属とすることが多いが、原因帰属は、多くの要因の影響を受けやすいため、複数場面で帰属させる必要があると思われる。第3に、競技直後の帰属ではなく、仮想場面や回想の帰属が多く用いられているが、その場合、帰属が望ましいと思われる方向に歪められている可能性がある。

次に、不安と原因帰属の関係を扱った研究もいくつか見られる (Biddle & Jamieson, 1988; 筒井他, 1989; Williams, 1982)。テスト不安と原因帰属の関係に関する研究では (Williams, 1982)、高不安の者は、失敗を比較的安定し、統御できない能力に帰属し、低不安の者は、失敗を不安定で、統御できる努力に帰属すると報告されている。

体育場面に関する研究 (筒井他, 1989) では、高不安の者は、成功の原因を運に、失敗の原因を能力に帰属し、低不安の者は、成功の原因を能力に帰属すると報告されている。また、競技スポーツ場面の研究 (Biddle & Jamieson, 1988) では、競技特性不安による原因帰属の差はみられないとされている。これらの結果の差異が状況による差であると言及するには、研究数が不足しているため、さらなる追研究が必要

と思われる。

そこで本研究においては、以下の3点を前提として、競技意欲や競技不安などと原因帰属の関係を明らかにすることを目的とする。第1に、帰属要因を従来の4要因をそのまま用いるのではなく、状況に応じて修正し、新たに付け加える。第2に、帰属が望ましいと思われる方向に歪められないように、実際の競技場面直後に帰属させる。第3に、他の状況の影響を少なくするために、一年間を通して複数回の帰属を調査する。

## 方 法

対象 調査対象は、大学生陸上競技部員44名(男25名、女19名)である。

期日 調査は平成2年5月～12月に行われた。

調査内容

- 1). 自己効力感としては、シーズン前に、目標記録と目標記録達成の可能性(%)を、「絶対達成できない(0)」～「絶対達成できる(100)」で調査した。
- 2). ここ2、3年の記録の伸びについて、「かなり伸びている(5)」～「かなり落ちている(1)」の5件法で調査した。
- 3). 今後の記録の伸びに対する期待について、「絶対に伸びる(5)」～「絶対に伸びない(1)」5件法で調査した。
- 4). 内発的動機づけとしては、「たいへん恥ずかしい(1)」～「たいへん誇らしい(5)」と、「たいへん不満(1)」～「たいへん満足(5)」と、「たいへんつまらない(1)」～「たいへんおもしろい(5)」と、「全然楽しくない(1)」～「たいへん楽しい(5)」の自己の競技生活に関する4項目、及び、「絶対に続けたくない(1)」～「絶対に続けたい(5)」の卒業後の競技継続意志に関する1項目、計5項目について5件法で調査した。
- 5). 競技意欲・競技不安としては、TSMI(Taikyo Sport Motivation Inventory)の下位尺度である、競技達成動機(TS1 目標への挑戦, TS2 技術向上意欲, TS3 困難の克服の合計点)と競技不安(TS5 失敗不安, TS6 緊張性不安の合計点)をそれぞれ用いた。

6). 心理的競技能力としては、徳永幹雄・橋本公雄が作成し、標準化したもので、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5尺度からなる心理的競技能力診断検査の合計点を用いた。

7). 原因帰属としては、一年間における各競技会後、成功感・失敗感について、「非常にうまくいった(1)」～「全然うまくいかなかった(4)」の4件法で質問した。そして、(1)(2)を選んだ場合は成功の原因を、(3)(4)の場合は失敗の原因を、能力、運、相手、努力、体調、それぞれについて、「よくあてはまる(5)」～「まったくあてはまらない(1)」の5件法で質問した。

以上の5帰属因を用いた根拠は、延べ333人に成功・失敗の原因を自由記述させた予備調査に基づいている。成功の原因としては、努力に帰属するものが99名(30%)、相手に帰属する者が68名(20%)、体調に帰属する者が46名(14%)であった。また、失敗の原因としては、努力に帰属する者が158名(47%)、体調に帰属する者が60名(18%)、能力に帰属する者が29名(9%)であった。この結果、課題の困難度要因を相手要因に置き換えることと、体調要因を加える必要性が感じられた。そこで、帰属因としては、能力、運、相手、努力、体調を用いた。

## 結果

各尺度における上位群と下位群の帰属得点の差を検討した。なお、上位群と下位群の群分けは、それぞれ各尺度の上位1/3と下位1/3としたが、同点者数の関係で各群の人数は多少異なる(Table 1, 2参照)。

### 1. 成功事態における各尺度と帰属得点との関係

成功事態における、各尺度の上位群と下位群の帰属得点と標準偏差を Table 1に示す。

記録の伸び尺度における上位群と下位群では、努力帰属得点に有意な差がみられた。Fig.1に示すように、記録が伸びていると思うものは、記録が伸びていないと思う者に比べて、成功の原因を努力に帰属させている。これは、記録の伸

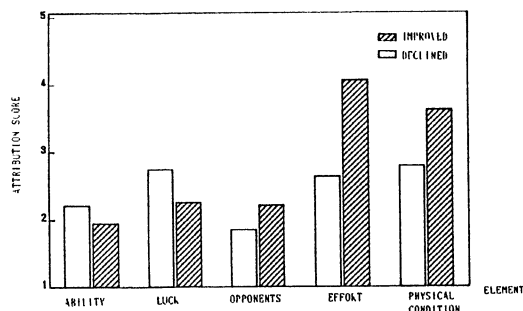


Fig.1 Mean scores for the five attribution elements of athletes improved and declined their own record in success condition

Table 1 Means and standard deviations for the five attribution elements on the seven clusters in success condition

Cluster	Element	n	Ability M(S.D.)	Luck M(S.D.)	Opponent M(S.D.)	Effort M(S.D.)	Physical Condition M(S.D.)
Self Efficacy	Low	11	2.98(0.85)	3.35(1.38)	2.62(1.06)	3.82(0.84)	3.12(0.66)
	High	15	2.57(1.29)	3.13(1.15)	2.30(1.23)	3.47(1.17)	3.39(1.19)
Record Change	Decline	10	2.20(1.61)	2.75(1.71)	1.84(1.35)	2.63(1.51)*	2.78(1.70)
	Improve	7	1.95(0.69)	2.26(0.69)	2.21(0.96)	4.07(0.60)	3.61(0.75)
Expectancy	Low	13	2.61(1.19)	3.07(1.38)	2.12(1.18)	3.24(1.33)	2.93(1.14)
	High	14	2.62(1.26)	3.05(1.33)	2.44(1.09)	3.76(1.29)	3.37(1.24)
Intrinsic Motivation	Low	17	2.51(1.37)	3.04(1.48)	2.03(1.21)	3.14(1.41)	3.05(1.37)
	High	16	2.44(1.42)	3.12(1.68)	2.36(1.38)	3.18(1.70)	3.13(1.74)
Competitive Motivation	Low	12	2.34(1.49)	2.75(1.50)	2.02(1.33)	2.87(1.57)	3.12(1.73)
	High	14	2.42(1.36)	3.10(1.46)	2.47(1.18)	3.43(1.54)	3.24(1.47)
Competitive Anxiety	Low	14	2.64(1.01)	3.36(1.23)	2.65(0.99)	3.83(0.71)*	3.43(0.83)*
	High	14	2.10(1.61)	2.60(1.76)	1.89(1.50)	2.60(1.83)	2.35(1.81)
Psychological Ability	Low	15	2.07(1.50)	2.55(1.52)	1.76(1.30)△	2.76(1.62)△	2.82(1.75)
	High	15	2.73(1.25)	3.36(1.34)	2.56(1.14)	3.67(1.24)	3.11(1.14)

\* p<.05 △ p<.10

びている者が、内的要因に帰属させ、自己高揚帰属を行っていることを示している。

競技不安尺度における努力、体調帰属得点に上位群と下位群で有意な差がみられた。Fig.2に示すように、競技不安の低い者は、高い者よりも、成功の原因を努力や体調に帰属させている。低不安者が内的で不安定要因に帰属している。

心理的競技能力尺度における上位群と下位群で、5%の有意水準に達していないけれども、相手帰属得点(p=0.08), 努力帰属得点(p=0.09)に差がみられる傾向があった。心理的競技能力の高い者は、低い者よりも、相手や努力に帰属させる傾向がある。

自己効力感尺度、今後の期待尺度、内発的動機づけ尺度、競技意欲尺度、それぞれにおける

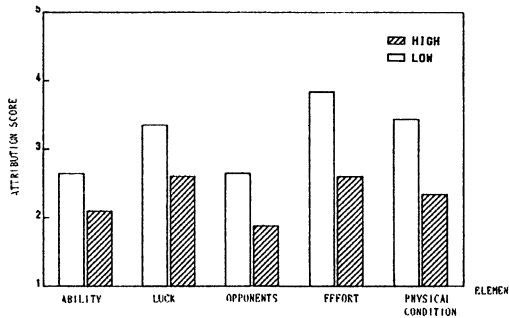


Fig.2 Mean scores for the five attribution elements of high and low competitive anxiety athletes in success condition

上位群と下位群に、得点差がみられる帰属因子はなかった。

## 2. 失敗事態における各尺度と帰属得点との関係

失敗事態における、各尺度の上位群と下位群の帰属得点と標準偏差を Table 2に示す。

記録の伸び尺度における上位群と下位群では、運、体調帰属得点に有意な差がみられた。Fig.3に示すように、記録が伸びていると思う者は、伸びていないと思う者に比べて、失敗の原因を運や体調要因に帰属させている。これは、記録の伸びている者が不安定要因に帰属させ、自己防衛帰属を行っていることを示している。

内発的動機づけ尺度における上位群と下位群で、体調帰属得点に差がみられた。Fig.4に示す

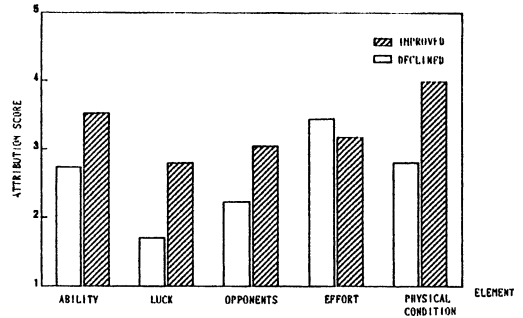


Fig.3 Mean scores for the five attribution elements of athletes improved and declined their own record in failure condition

Table 2 Means and standard deviations for the five attribution elements on the seven clusters in failure condition

Cluster	Element	n	Ability M(S.D.)	Luck M(S.D.)	Opponent M(S.D.)	Effort M(S.D.)	Physical Condition M(S.D.)
Self Efficacy	Low	11	2.59(0.73)	2.51(0.86)	2.53(0.94)	2.86(1.07)	3.16(0.89)
	High	15	3.10(1.21)	2.23(1.03)	2.42(1.19)	3.53(1.08)	3.52(1.15)
Record Change	Decline	10	2.74(1.37)	1.70(1.04)*	2.24(1.03)	3.45(1.57)	2.80(1.22)*
	Improve	7	3.53(0.75)	2.81(0.74)	3.04(0.90)	3.17(1.23)	3.98(0.52)
Expectancy	Low	13	2.91(1.08)	2.11(1.02)	2.64(1.12)	3.42(1.41)	3.53(0.94)
	High	14	2.72(1.02)	2.70(0.86)	2.19(0.86)	3.42(0.70)	3.38(1.23)
Intrinsic Motivation	Low	17	3.05(1.24)	2.23(0.99)	2.37(1.01)	3.37(1.02)	2.83(0.87)*
	High	16	3.02(0.99)	2.61(1.15)	2.18(0.99)	3.26(0.91)	3.72(1.10)
Competitive Motivation	Low	12	3.15(1.14)	1.86(0.94)*	2.31(1.14)	3.64(1.16)	3.38(0.82)
	High	14	2.74(1.07)	2.69(1.00)	2.18(0.92)	3.36(0.80)	3.69(1.06)
Competitive Anxiety	Low	14	2.75(0.98)	2.48(0.86)	2.50(1.10)	3.26(1.06)	3.07(0.97)
	High	14	3.25(1.48)	2.33(1.14)	1.95(1.20)	3.20(1.25)	2.85(1.25)
Psychological Ability	Low	15	3.15(1.46)	1.84(0.98)*	2.00(1.26)	3.52(1.41)	3.10(1.18)
	High	15	2.52(0.92)	2.62(0.98)	2.34(0.92)	3.21(0.98)	3.17(1.27)

\* p < .05

ように、内発的動機づけの高い者は、低い者よりも、失敗の原因を体調に帰属させている。これも自己防衛帰属を示している。

競技意欲尺度における上位群と下位群で、運帰属得点に差がみられた。Fig.5に示すように、競技意欲の高い者は、低い者よりも、失敗の原因を運に帰属させている。これも自己防衛帰属を示している。

心理的競技能力尺度における上位群と下位群で、運帰属得点に差がみられた。Fig.6に示すように、心理的競技能力の高い者は、低い者よりも、失敗の原因を運に帰属させている。これも自己防衛帰属を示している。

自己効力感尺度、今後の期待尺度、競技不安尺度、それぞれにおける上位群と下位群に、得点差がみられる帰属因子はなかった。

## 考 察

成功事態において、記録が伸びている者が自己高揚帰属を示したが、意欲・動機づけと原因帰属に明確な関連性はみられなかった。

この理由は、競技スポーツを行っている者の多くは、そのスポーツが得意だから、あるいは好きだから選んでおり、その競技に対して高い有能感や内発的動機づけを既に持っているためと思われる。したがって、成功場面では、レベルに関係なく、自己高揚帰属を行っており、差がみられない。これは、意欲の低い者が成功の原因を運や困難度に帰属する学業場面とは異なるものである。これらの点で、意欲の低い者の有能感や内発的動機づけをこれから育てていく必要のある学業場面とは異なるのではないかと推察される。

失敗場面において、記録の伸び、内発的動機づけ、競技意欲、心理的競技能力といった多くの尺度と原因帰属の間に有意な関係がみられ、いずれも上位群が下位群に比べて、運あるいは体調といった不安定要因に帰属しており、自己防衛帰属が支持された。これは、失敗時に意欲の高い者が努力不足に帰属する学業場面の帰属とは異なっていることが改めて確認された。スポーツにおいては、短期の努力がすぐに成功に

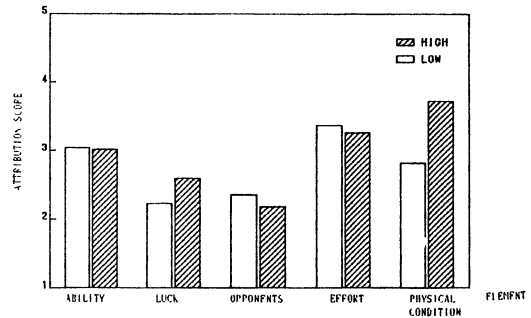


Fig.4 Mean scores for the five attribution elements of high and low intrinsic motivation athletes in failure condition

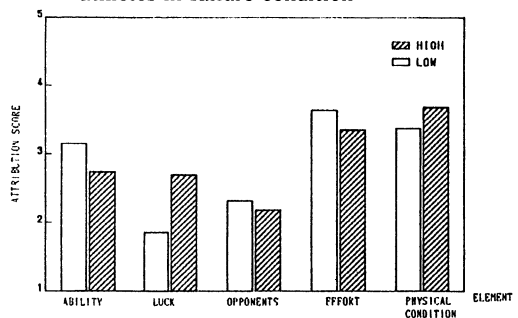


Fig.5 Mean scores for the five attribution elements of high and low competitive motivation athletes in failure condition

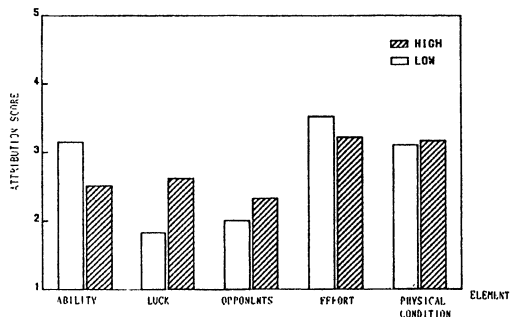


Fig.6 Mean scores for the five attribution elements of high and low psychological ability athletes in failure condition

直結するとは限らないため、失敗時の努力不足帰属が続くと、次第に能力不足に帰属しがちである。その結果、学習性無力感に陥り、競技意欲の低下が予想される。それを防ぐために、能力不足や努力不足以外の外的要因に帰属し、競技意欲を低下させない自己防衛帰属をすることが重要と思われる。失敗場面において、自己防衛ができていのかどうか、競技意欲等に反映していると思われる。失敗事態には、自己を傷つけないような防衛帰属を行わせて、既に持つ

ている自己有能感や内発的動機づけを低下させないように注意する必要がある。

競技不安についてみると、競技不安の低い者は、高い者よりも、成功の原因を努力や体調といった内的要因に帰属させて、自己高揚帰属を行っている。これは、Biddle & Jamieson(1988)の報告と異なるものである。彼らの研究では、競技不安尺度を用いているものの、体育専攻生が初対面の人と卓球ゲームを行う課題であるため、実際の競技場面とはかけ離れている。彼ら自身が指摘するように、本研究のように実際の競技場を用いないと、競技不安が原因帰属に及ぼす影響は明らかにならないと思われる。

最後に、体調要因が多くの尺度において有意差を持ったことから、競技スポーツの帰属因としては、多くの研究で用いられている4要因に加えて、内的な、不安定要因であり、統御不可能である、体調要因を加えることが必要と考える。同じ内的な、不安定要因でも、統御できる努力要因とは異なった傾向を持つと思われるためである。また、競技種目によっては、課題の困難度要因を相手要因に置き換えることも必要であると思われる。さらに、その他にもつけ加えるべき要因があるかも知れないため、従来の4帰属因のみにとらわれない必要があると思われる。

## 要約

本研究においては、以下の3点を前提として、競技意欲や競技不安と原因帰属の関係を明らかにすることを目的とする。第1に、帰属因として従来の4因子をそのまま用いるのではなく、修正し、つけ加える。第2に、実際の競技場面直後に帰属させる。第3に、一年間を通して複数回の帰属を調査する。

被験者は陸上競技選手44名である。帰属因は、努力、能力、運、相手、体調の5因子を用いた。結果は以下の通である。

1. 成功の原因を、記録が伸びていると思う者は努力に帰属し、競技不安の低い者は努力や体調に帰属する。これらは、自己高揚バイアスと思われる。

2. 失敗の原因を、記録が伸びていると思う者は運や体調に帰属し、内発的動機づけの高い者は体調に帰属し、競技意欲の高い者や心理的競技能力の高い者は運に帰属する。これらは、自己防衛バイアスと思われる。

## 文献

- 相川充・三島勝正・松本卓三 1985 原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響 —Weinerの達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討— 教育心理学研究, 33,195-204
- Auvergne,S. 1983 Motivation and Causal Attribution for High and Low Achieving Athletes. *International Journal of Sports Psychology*, 14,85-91.
- Biddle, S. J. H., & Jamieson, K. I. 1988 Attribution Dimensions : Conceptual Clarification and Moderator Variables. *International Journal of Sports Psychology*, 19,47-59.
- Brawley, L. R., & Roberts, G. C. 1984 Attributions in Sports : Research Foundations, Characteristics, and Limitations. In Silvia, J. M., & Weinberg, R. S. (Eds.), *Psychological Foundations of Sports*. Human Kinetics Publishers: Illinois. Pp. 197-213.
- 広瀬幸雄・石井徹・木村昌幸・北田隆 1982 達成動機と原因帰属がパフォーマンスに及ぼす効果 —Weinerのモデルの実験的検討— 実験社会心理学研究, 22-1, 27-36.
- 伊藤豊彦 1980 運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属に関する研究 体育学研究, 25-2, 105-11.
- 伊藤豊彦 1985 スポーツにおける原因帰属様式の因子構造とその特質 体育学研究, 30-2, 153-60.
- 伊藤豊彦 1987 原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響 —スポーツ行動に関する原因帰属モデルの検討— 体育学研究, 31-4, 263-71.
- Kukla, A. 1972 Attributional determinants of achievement-related behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21-2, 166-74.
- Lefebvre L. M. 1979 Achievement Motivation and Causal Attribution in Male and Female Athlete. *International Journal of Sports Psychology*, 10, 31-41.
- Lefebvre, L., & Cunningham, J. 1977 The successful football team: effects of coaching and team cohesiveness. *International Journal of Sports Psychology*, 8, 29-41

1)本研究は、平成2年度水野財団助成により行われた成果である。記して感謝の意を表します。

2)研究に際しご協力頂いた九州大学健康科学センターの徳永幹雄教授、橋本公雄助教授、及び、愛知教育大学陸上競技部員の皆様に感謝致します。

- McAuley, E. & Russel, D 1983 Affective Consequences of Winning and Losing : AnAttributional Analysis *Journal of Sports Psychology*, 5, 278-87
- 蘭千壽・外山みどり 1991 帰属過程の心理学 ナカニシヤ出版
- Rejeski, W.J., & Brawley, L R. 1985 Attribution Theory in Sports: Current Status and New Spectives. *Journal of Sports Psychology*, 7, 77-99
- Touhey, J C , & Villemetz, W J 1975 Need achievement and risk-taking performance: A clarification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 713-19.
- 筒井清次郎・天野彰夫・西田保 1989 体育における学習意欲と原因帰属の関係について *体育の科学*, 39-10, 797-800.
- Weiner, B. 1974 *Achievement motivation and attribution theory* Morrictown, N. J:General Learning Press.
- Weiner, B , Feieze, I., Kukla, A., Reed.I., Rest,S., & Rosenbaum, R M. 1971 *Perceiving the causes of success and failure* New York General Learning Press. Pp. 95-120
- Weiner, B., & Kukla, A 1970 An attributional analysis of achievement motivation *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 1-20
- Weiner, B, & Sierad, j 1975 Missattribution for failure and the enhancement of achievement strivings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31-3, 415-21.
- Williams, J M G 1982 Expectancy x Value: A Model of how attributions sffect educational attainment In
- Antaki, C, & Brewin, C.(Eds), *Attributions and Psychological Change*. London : Academic Press.
- Yukelson, D, Weinberg, R S., & Jackson,A. 1981 *Attributions and Performance . An Empirical Test of Kukla's Theory*. *Journal of Sports Psychology*, 3, 46-57